徳保薬環セ年報　No.10　49 - 56（2020）

感染症発生動向調査情報による徳島県の患者発生状況（2019 年）

徳島県立保健製薬環境センター
河野　郁代・川上　百美子・佐藤　豪

Infectious Diseases Surveillance Reports in Tokushima Prefecture in 2019

Ikuyo KAWANO, Yumiko KAWAKAMI, and Go SATO

Tokushima Prefectural Public Health, Pharmaceutical and Environmental Sciences Center

Ⅰ　はじめに

当センターでは，「徳島県感染症発生動向調査実施要綱」に基づく徳島県感染症情報センターとして，徳島県における感染症の発生情報の収集，解析を行っている．解析した情報は週報や月報として医療機関や県民等に還元し，感染症の拡大防止や公衆衛生の向上に努めている．

今回，2019 年 1 月から 12 月までの患者発生状況についてまとめたので報告する．

Ⅱ　方法

感染症発生動向調査における患者届出対象疾患は，「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」により指定されている一類から五類感染症，新型インフルエンザ等感染症の 88 疾患（全数把握対象疾患），指定届出機関から届出を受ける 25 疾患（定点把握対象疾患）とした．

感染症の発生情報は，定点把握対象疾患のうち，内科，小児科，眼科及び基幹定点週報分は，月曜日から日曜日までの週単位で，性感染症定点及び基幹定点月報分は月単位で集計解析を行った．

Ⅲ　結果及び考察

1　全数把握対象疾患の届出状況（表 1）

（1）一類感染症

一類感染症の届出はなかった．

（2）二類感染症

①　結核

年間届出数は 136 件で，前年（143 件）とほぼ同数であった．2016 年以降，漸減傾向にある．月別の届出数では，季節的な特徴は見られなかった．類型では，「患者」が 101 件，「無症状病原体保有者」は 35 件であった．届出者を年齢別にみると，60 歳を越え年齢が高くなるにつれ大きく増加し，60 歳以上が 107 件と全体の約 79%を占めた．性別では，男性 72 件，女性 64 件とやや男性が多かった．

年齢別に類型を比較すると，50 歳以上では「患者」が 94 件（80.0%）と大部分を占めたのに対し，50 歳未満では「無症状病原体保有者」が 11 件（61.1%），「患者」は 7 件（38.9%）であり，若年層では「無症状病原体保有者」の割合が高かった．

また職業別では，医療・介護などの施設関係者や建設業，調理師等，人と接する機会が多く集団感染に繋がる環境にある者も見られたことより，感染拡大防止のため施設関係者等に対し感染予防啓発，施設内感染対策の徹底が不可欠と考えられた．

（3）三類感染症

①　細菌性赤痢

細菌性赤痢は 10 月に 1 件の届出があった．過去 5 年間，県内の患者発生は報告されていない．原因菌は *Shigella sonnei* であり，感染地はモロッコで生野菜の喫食による経口感染と推定された．

②　腸管出血性大腸菌感染症

年間届出数は 14 件で，前年の 11 件からやや増加した．月別の届出は，2, 6, 7, 10, 11 月で，7 月と 10 月に 5 件ずつと多く報告された．年齢別では，10 歳未満から 80 歳代までの全年齢層で報告され，性別では，男性 7 件，女性 7 件であった．診断の類型では「患者」が 11 件，「無症状病原体保有者」が 3 件と患者が多く報告され，血清型別では本疾患の多くを占

めるO157，O26の血清型が報告された．

「患者」報告例の感染経路や感染源は，肉の喫食3件，生肉喫食2件，不明6件でいずれも国内にて感染したと推定された．また，「無症状病原体保有者」の3件のうち2件は生レバーなど生肉を喫食した「患者」との接触者検診により報告され，同じく生肉を喫食したことによる経口感染と推定された．

（4）四類感染症

① 重症熱性血小板減少症候群

本年は9件の届出があり，2013年3月に届出対象疾患となって以来の過去最高の届出数となった．届出月は3～10月とマダニの活動時期に一致する春から秋に集中し，年齢及び性別は50～80歳代の男性4件，女性5件であった．感染経路は，多くが農作業などの野外活動時にマダニ等に刺咬され感染したと推定されたが，ウイルスに感染した飼育動物からの感染が推定された例もみられた．

徳島県では本疾患をはじめ，つつが虫病，日本紅斑熱など，原因微生物を保有するマダニ等の刺咬による感染症が毎年のように報告されている．重症化例も見られることより登山，林業，農作業など野外活動機会の多い中高年者を中心に，ダニ・昆虫媒介性疾患に対する予防対策の啓発が重要と考えられた．

② デング熱

デング熱は，11月に1件届出があった．患者は，30歳代の男性で，ベトナムに滞在中，媒介蚊に刺されたことにより感染したと推定されている．過去5年間では，2014年と2016年に1件ずつ報告され，いずれも海外旅行中に感染したと推定された．デングウイルスを媒介するヒトスジシマカは我が国にも広く分布し夏期を中心に活発に活動する．2014年には約70年ぶりに東京都を中心として国内流行が発生した．また，本年は国内感染例が3件発生している．マダニを含め昆虫媒介性疾患は刺されないことが第一の感染予防策であり，広く啓発することが重要と考えられた．

③ 日本紅斑熱

12件届出があった．過去5年間での年間届出数推移は4～13件と，年毎で差が大きい．届出月は5～11月と，マダニの活動時期にあたる春から秋に集中していた．年齢は60～90歳代，性別は男性6件，女性6件であった．感染経路は，重症熱性血小板減少症候群と同様にレジャーや農作業等の野外活動において，マダニに刺咬されたと推定されている．

④ マラリア症

8月に1件の届出があった．年齢は10歳代の男性で感染地域はナイジェリアと推定される．過去には2011年に1件報告されており，海外で感染したと推定されている．

⑤ レジオネラ症

13件の届出があった．2014年以前は毎年1～3件の報告数で推移していたが，2016年以降は11件～15件と増加している．年間を通して発生し，季節的な特徴は見られなかった．年齢別では50～90歳代まで幅広い年齢層から報告され，性別は男性10件，女性3件であった．病型は12件が「肺炎型」で，1件が「ポンティアック熱型」であった．推定感染経路は水系感染が6件，不明7件，感染地域は国内10件，不明3件であった．

（5）五類感染症

① アメーバ赤痢

7件の届出があり，年齢は，40～70歳代で，性別は全例男性であった．推定感染経路は性的接触が1件，不明6件，感染地域は国内6件，不明1件であった．

② ウイルス性肝炎（E型，A型を除く）

2件届出があった．5歳未満と30歳代の男性で，病型は「サイトメガロウイルス」と「B型肝炎」，いずれも国内にて感染したと推定された．

③ カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症

11件届出があった．年齢は，40～80歳代と幅広く，性別は男性8件，女性3件であった．推定感染経路は手術部位や医療器具を介しての感染が2件，以前からの保菌が2件，不明が7件，感染地域は国内10件，国外で1件感染したと推定された．

④ 急性脳炎

2件届出があった．年齢は5歳未満と80歳代で男性1件，女性1件であった．病型は「単純ヘルペスウイルス」が1件，不明が1件，感染地域は1件が国内と推定されるが，もう1件は不明であった．

⑤ クロイツフェルト・ヤコブ病

3件届出があった．年齢は60～80歳代で，性別は男性2件，女性1件であった．病型はいずれも「孤発性プリオン病」で，感染経路・地域は不明であった．

⑥ 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

4件届出があった．過去5年間では一番多い届出数となった．年齢は60～70歳代で，性別は男性2件，女性2件であった．推定感染経路は創傷感染が3件，不明が1件，感染地域はいずれも国内と推定された．

⑦ 後天性免疫不全症候群

4件届出があった．過去5年間では毎年4～9件報告されている．年齢は20～50歳代，性別は男性2件，女性2件であった．類型は全て「無症状病原体保有者」であった．感染経路は，いずれも同性または異性間での性的接触で，国内での感染が2件，国外での感染が1件，不明が1件と推定された．

現在，保健所等を中心に無料検査・相談が実施されている．本年，届出があった4件のうち2件は，県内保健所で実施された無料検査にて発見され，地域連携医療機関での診断，報告につながった．今後もハイリスク層や発生報告の多い20～50歳代を中心とした幅広い年齢層に対し，より積極的な普及啓発を推進し，HIV感染の早期発見による早期治療と，感染拡大の抑制に努めることが重要と考えられた．

⑧　侵襲性インフルエンザ菌感染症

4件届出があった．過去5年間の届出数は1～2件で推移しており，過去5年間で一番多い届出数となった．年齢は60～80歳代で，男性1件，女性3件であった．いずれも国内にて感染したと推定された．

⑨　侵襲性肺炎球菌感染症

11件届出があった．過去5年間では毎年4～9件報告されている．年齢は5歳未満3件と50～80歳代8件，性別は男性7件，女性4件，いずれも国内にて感染したと推定された．

⑩　水痘（入院例）

5件届出があった．年齢は10歳未満1件と10～40歳代が4件であり，性別は男性2件，女性3件であった．いずれも国内にて感染したと推定された．

⑪　梅毒

30件届出があった．2015年以前は毎年2～3件の届出数で推移していたが，2016年以降は11件～30件と増加している．年齢別では，20～30歳代で21件，40～80歳代で9件と若年層に多く，性別では男性20件，女性10件と男性が多かった．感染地域は国内での感染が23件，不明が7件であった．

現在，我が国では若年層を中心に梅毒患者の増加が大きな問題となっている．HIV と同様に，発生報告の多い 10～40歳代を中心に，感染者及びパートナーともに積極的な感染予防啓発が重要と考えられた．

⑫　播種性クリプトコックス症

2014年9月19日より五類全数把握対象感染症に指定され，本年は3件届出があった．過去4年間では2015年に1件，2018年に2件報告されている．年齢は70～80歳代，性別は男性2件，女性1件であった．いずれも免疫不全が原因で，感染地域は国内と推定された．

⑬　百日咳

百日咳はこれまで小児科定点把握疾患として報告されていたが，2018年1月1日より五類全数把握対象感染症に指定された．2018年の届出数は31件，2019年は80件と大幅に増加している．年齢は10歳未満40件，10歳代31件，30～60歳代9件と若年層が大半を占めている．性別は男性35件，女性45件であった．感染経路は家族内感染が21件，学校関連の感染32件，その他1件，不明が26件であった．感染地域は国内74件，不明6件であった．

⑭　風しん

2件届出があった．年齢は30～40歳代，性別は男性1件，女性1件であった．感染経路はいずれも不明，感染地域は国内と推定された．風しんは抗体価の低い女性が妊娠中に罹患すると子供に難聴などの重い障害（先天性風疹症候群（CRS））が起こる可能性があるため，今後も迅速な発生報告，流行情報の提供を行う必要がある．

⑮　麻しん

1件届出があった．年齢及び性別は 20 歳代の男性で，感染経路は不明，国内にて感染したと推定された．患者周辺への感染拡大は見られなかった．麻しんは感染力が非常に強く，空気感染により容易に感染が拡大することから，ワクチン接種による感染予防啓発が重要と考えられる．

表1　全数把握対象疾患の届出数

類型	疾病名	2019年	前年
二類	結核	136	143
三類	細菌性赤痢	1	0
	腸管出血性大腸菌感染症	14	11
四類	重症熱性血小板減少症候群	9	1
	デング熱	1	0
	日本紅斑熱	12	4
	マラリア症	1	0
	レジオネラ症	13	14
五類	アメーバ赤痢	7	3
	ウイルス性肝炎（E型，A型を除く）	2	2
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	11	8
	急性脳炎	2	4
	クロイツフェルト・ヤコブ病	3	2
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	4	3
	後天性免疫不全症候群	4	9
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	4	1
	侵襲性肺炎球菌感染症	11	9
	水痘（入院例）	5	6
	梅毒	30	30
	播種性クリプトコックス症	3	2
	百日咳	80	31
	風しん	2	3
	麻しん	1	1

2　定点把握対象疾患（週報）の動向（表 2）

（1）内科，小児科定点

①　インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）

年間報告数は 10,024 件であり，前年（12,318 件）よりやや減少した．本年の前期流行は，例年より遅く第 2 週に流行期入りした後，2 週連続で報告数が増加しピーク（42.6 件／定点）を迎えた．ピークの高さは前年（41.2 件／定点）よりわずかに高かったものの，報告数が注意報レベル（10 件／定点）を超えた期間（第 2～7 週）は，前年（2017 年第 51 週～2018 年第 10 週）と比べ短かった．後期流行については，例年より約 3 週早い第 48 週に流行開始の目安とされる 1.0 件／定点を超え，流行シーズンを迎えた．

年齢層別報告数では，4 歳以下 18.5%，5～9 歳 26.7%，10～14 歳 15.0%，15～19 歳 5.3%，20 歳以上 34.5%であり，前年と比較して，20 歳以上の割合が高かった．

（2）小児科定点

①　RS ウイルス感染症

年間報告数は 1,862 件であり，前年（1,684 件）よりやや増加した．本疾患は，2016 年以前は主に秋から冬にかけて流行していたが，2017 年以降は 7 月頃から報告数が増加し，9 月初旬にピークを迎え，夏から秋にかけて流行している．本年は第 31 週頃（7 月下旬）より報告数が増加し始め，第 35 週以後急増しピーク（第 38 週 : 7.1 件／定点）を示した．以降，報告数は減少したものの流行期間は長く，第 45 週まで全国平均を上回る報告数が続いた．

本疾患は 2 歳までの乳幼児からの報告が多く，本年の年齢層別報告数でも，0 歳 29.7%，1 歳 37.3%，2 歳 17.9%，3 歳 8.4%，4 歳以上 6.8%であり，前年と同様に 2 歳以下の乳幼児の割合が大半（約 85%）を占めた．

②　咽頭結膜熱

年間報告数は 563 件であり，前年（466 件）より増加した．本疾患の流行パターンは，4 月ごろから報告数が増加し始め，7～8 月にピークを示した後，冬季にも流行のピークが見られる．本年は 4 月下旬頃より報告数が増加しはじめ，第 26 週に小さなピーク（0.91 件／定点）を示した．以降，やや減少したものの，県内の一部地域での地域流行等により第 47 週から急増し全国平均を上回る報告数のまま越年した．

年齢層別報告数は，0～1 歳 34.3%，2～3 歳 33.2%，4～5 歳 17.2%，6～7 歳 6.6%，8 歳以上 8.7%であり，5 歳以下が約 85%を占めた．

③　A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎

年間報告数は 772 件と，前年（1,729 件）から大きく減少した．本疾患は，冬季および春から初夏にかけて報告数が増加するとされる．本年は，年当初から報告数が少なく年間を通して目立ったピークも無く報告数の低い状態が続いた．

年齢層別報告数は，0～1 歳 3.2%，2～3 歳 12.4%，4～5 歳 32.1%，6～7 歳 24.7%，8～9 歳 11.9%，10～14 歳 10.6%，15 歳以上 5.1%と，学童期小児の割合が高かった．

④　感染性胃腸炎

年間報告数は 6,192 件であり，前年（6,511 件）からわずかに減少した．本疾患の流行パターンは，初冬から増加し始め 12～1 月頃に一度ピークが見られた後，春にもう一つ緩やかなピークを示すことが多い．本年の前期流行は，前年の後期流行に続き第 6 週頃までは報告数が多かったものの，以降は緩やかに減少した．本年は目立った後期流行はなかった．

年齢層別報告数は，0～1 歳 26.7%，2～3 歳 24.4%，4～5 歳 15.6%，6～7 歳 8.5%，8～9 歳 5.9%，10～14 歳 9.3%，15 歳以上 9.7%と 5 歳以下の乳幼児が全体の約 67%を占めた．

⑤　水痘

年間報告数は 262 件と，前年（259 件）とほぼ同数報告された．本疾患は年間を通して発生するが，主に冬から春にかけて流行し，夏から初秋は減少するとされる．本年も年間を通して報告され，9 月初旬に県内の一部地域において地域流行などみられたものの，大きなピークは見られず，年間を通じて低い報告数（1.0 件／定点以下）のまま推移した．

年齢層別報告数は，0～1 歳 8.0%，2～3 歳 17.2%，4～5 歳 22.9%，6～7 歳 23.7%，8～9 歳 17.9%，10 歳以上 10.3%と 10 歳未満の報告が全体の約 90%を占めた．

⑥　手足口病

年間報告数は 2,086 件と，前年（1,212 件）より大きく増加した．本疾患は 1 年おきに流行を繰り返しており，全国的に見ても本年は流行年であったといえる．また本疾患は夏に流行する代表的な感染症であり，例年 7～8 月にピークを迎える．本年も，5 月中旬頃より報告数が増加し始め，第 27 週頃から急増し，第 30 週（7 月下旬）にピーク（11.1 件／定点）が見られた後，急激に減少した．年齢層別報告数は，0～1 歳 46.5%，2～3 歳 37.4%，4～5 歳 10.8%，6～7 歳 2.7%，8 歳以上 2.6%であり，5 歳以下からの報告が全体の約 95%を占めた．

⑦　伝染性紅斑

年間報告数は 666 件と，前年（200 件）から大きく増加し，2015～2016 年以来 3 年ぶりの流行である．報告数では 2011 年以来の高値となった．本疾患は，年始頃より 7 月上旬にかけて増加するが，流行の小さい年は季節性が見られないことが多い．本年は第 20 週から増加し，ピーク（第 36 週 1.78 件／定点）を示し，その後増減を繰り返しながら第 51 週まで全国平均を上回った状態であった．

年齢層別報告数は，0～1 歳 5.1%，2～3 歳 22.5%，4～5 歳

32.4%，6～7 歳 21.5%，8～9 歳 11.1%，10 歳以上 7.4%と，2～7 歳の幼少児での割合が高かった．

⑧　突発性発しん

年間報告数は 470 件であり，前年（848 件）から大きく減少した．本疾患は，季節性も年次推移も認められず，年間を通じてほぼ一定の範囲内で推移するとされる．本年もピークは示さず，大きな季節的変動も見られないまま，報告数は一定の範囲内（0.1～0.7 件／定点）で推移した．

年齢層別報告数は，0～1 歳 89.8%，2～3 歳 7.7%，4～5 歳 1.9%，6 歳以上 0.6%と，1 歳以下が最も多く報告され，3 歳以下で大半（約 98%）を占めた．

⑨　ヘルパンギーナ

年間報告数は 486 件と，前年（817 件）から大きく減少した．本疾患は，手足口病とともに主に乳幼児の間で流行する夏期の代表的な感染症である．本年は，6 月下旬（第 26 週頃）より報告数が増加しはじめたものの，増加は緩やかであり，前年より約 1 週間遅くピーク（第 30 週 2.2 件／定点）を示した．

年齢層別報告数では，0～1 歳 45.3%，2～3 歳 32.9%，4～5 歳 16.9%，6～7 歳 3.5%，8 歳以上 1.4%であり，5 歳以下の乳幼児が約 95%を占めた．

⑩　流行性耳下腺炎

年間報告数は 56 件であり，前年（110 件）から減少した．本疾患は年間を通して発生するが，晩冬から春にかけて報告数が増加するとされる．また，3～4 年ごとの周期で流行を繰り返すが，本年は流行は見られず年間を通して低値で推移した．

年齢層別報告数は，0～1 歳 0%，2～3 歳 10.7%，4～5 歳 37.5%，6～7 歳 25.0%，8～9 歳 17.9%，10 歳以上 8.9%であり，4～7 歳の幼小児からの報告数が約 63%を占めた．

（3）眼科定点

①　急性出血性結膜炎

年間報告数は 3 件と前年（0 件）から増加した．過去 5 年間でも毎年 0～1 件で推移し，徳島県内での流行は見られていない．

②　流行性角結膜炎

年間報告数は 117 件と前年（58 件）から増加した．過去 5 年間で最も多い報告数となった．全国では過去 5 年間の年間報告数は横ばいで推移しているのに対し，県内では年々増加傾向にある．

年齢層別報告数は，10 歳未満 25.6%，10 歳代 6.8%，20 歳代 8.6%，30 歳代 23.1%，40 歳代 18.0%，50 歳代 5.1%，60 歳以上 12.8%と幅広い年齢層から報告された．

（4）基幹定点

①　細菌性髄膜炎

年間報告数は 3 件と，前年（4 件）とほぼ横ばいであった．過去 5 年間では，毎年 0～4 件で推移している．

②　無菌性髄膜炎

年間報告数は 7 件と，前年（3 件）から増加した．0 歳～40 歳代の幅広い年齢層から報告された．過去 5 年間では，毎年 1～3 件で推移している．

③　マイコプラズマ肺炎

年間報告数は 131 件と，前年（26 件）から大幅に増加した．本疾患は年間を通して発生するが，秋から冬にかけてやや多くなるとされる．本年も第 38 週以降，県内の一部地域での地域流行等により急増し全国平均を上回る報告数のまま越年した．年間を通して 0～1.86 件／定点で推移した．

年齢層別報告数は，5 歳未満 34.4%，5～9 歳 38.2%，10 歳代 20.6%，20 歳以上 6.9%と，幅広い年齢層から報告された．学童期を含む 10 歳未満からの報告数（約 73%）が他の年齢層に比べ多かった．

④　クラミジア肺炎

年間報告数は 1 件（80 歳代）と，前年（1 件）と同数報告された．過去 5 年間では，毎年 0～1 件で推移している．

⑤　感染性胃腸炎（ロタウイルス）

年間報告数は 8 件と，前年（2 件）から増加した．例年，年当初から春先にかけて多く報告され，夏季は減少するなど季節的な特徴も見られたが，本年は，春季と秋季に報告が続いたものの，0～0.29 件／定点の低値で推移した．

年齢層別報告数は，5 歳未満 4 件，5～9 歳 4 件であった．

表 2　内科，小児科，眼科定点報告対象疾患の週別報告数

週	期間	インフルエンザ	小児科定点										眼科定点	
		インフルエンザ	RSウイルス感染症	咽頭結膜熱	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	感染性胃腸炎	水痘	手足口病	伝染性紅斑	突発性発しん	ヘルパンギーナ	流行性耳下腺炎	急性出血性結膜炎	流行性角結膜炎
1	12/31～	343	19	2	14	218	4	1	6	7				
2	1/7～	944	13	4	19	286	7	1	5	9				3
3	1/14～	1,370	19	3	22	288	7	16	1	8				2
4	1/21～	1,575	28	1	17	236	4	3	2	7				1
5	1/28～	1,474	18	4	21	228		7	4	6		1		2
6	2/4～	936	44	4	21	166		9	2	4		1		4
7	2/11～	370	32	5	13	131	1	8	3	3		2		1
8	2/18～	283	31	6	18	109	3	9	4	8		1		2
9	2/25～	181	30	11	13	109	7	5	2	11		1		6
10	3/4～	108	44	10	9	91	4	8	2	6		1		1
11	3/11～	95	49	12	21	136	5	11	2	5	1			2
12	3/18～	63	52	10	17	157		3	1	7				9
13	3/25～	48	33	3	23	107	5	4	2	5		1		1
14	4/1～	55	30	7	15	128	4	3	3	7				4
15	4/8～	32	43	1	13	131	3	5	5	9		1		5
16	4/15～	98	39	6	18	167		2	5	11				6
17	4/22～	44	36	12	13	142	4	5	7	5				
18	4/29～	28	11	2	16	121	4	7	3	11	4	2		
19	5/6～	18	9	15	22	127	5	7	5	8	2	3	2	
20	5/13～	21	6	7	25	145	2	18	9	11				2
21	5/20～	19	13	13	15	146	10	21	10	12	3			3
22	5/27～	9	10	9	20	135	2	31	11	9	2	1		4
23	6/3～	11	8	14	22	159	4	47	8	10	7	1		
24	6/10～	3	9	19	25	150	8	65	15	10	9	2		
25	6/17～		9	11	26	148	3	81	11	10	7	2		3
26	6/24～		5	21	13	118	8	88	5	16	17	3		1
27	7/1～		14	16	14	100	2	117	11	16	25	5		3
28	7/8～	2	6	10	17	117	6	176	12	13	40			5
29	7/15～	1	4	12	10	73	4	168	16	14	46	2		1
30	7/22～		16	12	6	119	7	256	19	12	51	1		6
31	7/29～		27	6	10	108	6	248	10	8	44	2	1	6
32	8/5～	1	55	9	6	79	5	151	13	8	46			2
33	8/12～		60	3	6	66	6	84	12	5	30	1		4
34	8/19～		51	6	5	63	4	69	18	11	20	1		1
35	8/26～		126	6	11	63	6	70	32	10	21			5
36	9/2～	1	153	7	11	61	15	42	41	7	18	1		3
37	9/9～		154	9	4	33	4	43	12	4	13			2
38	9/23～	6	163	5	7	58	2	21	20	10	14			
39	9/16～	5	83	5	9	60	6	24	27	6	10			5
40	9/30～	2	66	8	9	64	3	8	28	11	12	2		1
41	10/7～	7	62	15	10	103	4	7	21	6	18	4		1
42	10/14～	2	58	18	16	82	6	7	16	6	8			
43	10/21～	7	29	13	11	71	8	9	27	9	5	1		
44	10/28～	3	26	14	17	56	4	12	37	13	2	1		
45	11/4～	14	17	8	8	79	8	11	29	7	3	2		1
46	11/11～	23	10	10	14	78	1	9	23	12		1		2
47	11/18～	33	9	21	12	93	7	7	20	12	2	2		2
48	11/25～	42	12	28	20	73	6	14	18	9	1	2		
49	12/2～	213	5	34	26	96	9	16	21	6	1			2
50	12/9～	357	5	34	19	87	10	16	15	11		2		2
51	12/16～	575	4	21	15	128	7	21	24	14	2	3		1
52	12/23～	602	7	21	8	103	12	15	11	15	2			
合計		10,024	1,862	563	772	6,192	262	2,086	666	470	486	56	3	117

3　定点把握対象疾患（月報）の動向

（1）基幹定点（表 3）

薬剤耐性菌感染症の総報告数は 282 件と，前年（261 件）から増加した．

①　メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

年間報告数は 276 件（男性 173 件，女性 103 件）であり，前年（258 件）からやや増加した．月別報告数では，月毎に増減はあったものの季節的な特徴は見られず，年間を通じて報告された．

年齢別報告数は, 10 歳未満 4.0%, 10 歳代 1.5%, 20 歳代 2.2%, 30 歳代 2.2%，40 歳代 3.6%，50 歳代 7.6%，60 歳代 12.7%，70 歳以上 66.3%と，60 歳を超え年齢が高くなるにつれ大きく増加した．

②　ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

年間報告数は 3 件（男性 2 件，女性 1 件）と，前年（3 件）と同数報告された．

年齢別報告数では，50 歳代，60 歳代，80 歳代から各 1 件の報告があった．

③　薬剤耐性緑膿菌感染症

年間報告数は 3 件（男性 2 件，女性 1 件）と，前年（0 件）より増加した．いずれも 70 歳代以上の報告であった．

過去 5 年では，毎年 0~1 件の届出数で推移している．

表 3　基幹定点（月報）報告対象疾患の月別報告数

	ﾒﾁｼﾘﾝ耐性黄色ﾌﾞﾄﾞｳ球菌感染症	ﾍﾟﾆｼﾘﾝ耐性肺炎球菌感染症	薬剤耐性緑膿菌感染症
1 月	34		
2 月	21		
3 月	16		
4 月	27		
5 月	28		2
6 月	14	1	
7 月	22		
8 月	25		
9 月	23		1
10 月	28		
11 月	21		
12 月	17	2	
合計	276	3	3
前年	258	3	

（2）性感染症定点（表 4）

性感染症の総報告数は 679 件で，前年（679 件）と同数報告された．男女別では，男性 442 件（前年 379 件），女性 237 件（前年 300 件）と，男性の報告数は前年より増加し，女性の報告数は減少した．

①　性器クラミジア感染症

年間報告数は 284 件と，前年（274 件）とほぼ同数報告された．月別報告数でも，月毎に増減はあったものの季節的な特徴は見られず，年間を通じて報告された．男女別では，男性 238 件（前年 212 件），女性 46 件（前年 62 件）と，男性は前年と比べ報告数が増加, 女性は減少し, 全体では男性（約 84%）が多くを占めた．

年齢別報告数では，10 歳代 4.2%，20 歳代 41.2%，30 歳代 30.6%，40 歳代 14.8%，50 歳以上 9.2%と，20～30 歳代からの報告が多かった．

②　性器ヘルペスウイルス感染症

年間報告数は 257 件と, 前年（277 件）と大きな変化はなく，月別報告数推移でも，月毎に増減はあったものの季節的な特徴は見られず，年間を通じて報告された．男女別では，男性 82 件（前年 58 件），女性 175 件（前年 219 件）と，男性は前年と比べ報告数が増加，女性は減少した．また性感染症全体では男性が女性より多く報告されているが，本疾患は女性が約 68%を占めるなど，女性の割合が他の疾患に比べ高いのが特徴である．

年齢別報告数は, 10 歳代 2.3%, 20 歳代 21.0%, 30 歳代 19.8%, 40 歳代 22.6%，50 歳代 11.3%，60 歳代 9.3%，70 歳以上 13.7%と，20～40 歳代がやや高かったものの，幅広い年齢層から報告された．また，60 歳以上の高齢者からの報告数が 23.0%と他の性感染症と比較して多い傾向が見られたが，潜伏していたウイルスによる再燃の可能性も考えられる．

③　尖圭コンジローマ

年間報告数は 79 件と，前年（86 件）からやや減少した．男女別では，男性 67 件（前年 69 件），女性 12 件（前年 17 件）と，前年と比べ男性・女性ともに報告数が減少し，全体では男性（約 85%）が多くを占めた．

年齢別報告数は, 20 歳代 24.1%, 30 歳代 35.4%, 40 歳代 25.3%, 50 歳代 10.1%，60 歳以上 5.1%と，他の年代に比べ 20～40 歳代からの報告が多く，全体の約 85%を占めた．

④　淋菌感染症

年間報告数は 59 件と，前年（42 件）から増加した．男女別では，男性 55 件（前年 40 件），女性 4 件（前年 2 件）と性器クラミジア，尖圭コンジローマと同じく男性からの報告が多く，約 93%を占めた．

年齢別報告数は，10 歳代 10.2%，20 歳代 38.9%，30 歳代 30.5%，40 歳代 10.2%，50 歳代以上 10.2%であった．他の性感染症と同様に，20～30 歳代の割合が高く，全体の約 70%を占めた．

表 4　性感染症定点報告対象疾患の月別報告数

	性器ｸﾗﾐｼﾞｱ感染症	性器ﾍﾙﾍﾟｽ感染症	尖圭ｺﾝｼﾞﾛｰﾏ	淋菌感染症
1 月	22	24	7	4
2 月	21	29	3	7
3 月	21	25	3	8
4 月	21	20	9	3
5 月	18	21	6	5
6 月	22	16	10	5
7 月	27	25	11	7
8 月	31	19	4	4
9 月	26	21	5	2
10 月	19	22	9	6
11 月	28	20	5	4
12 月	28	15	7	4
合計	284	257	79	59
前年	274	277	86	42

Ⅳ　まとめ

2019 年の感染症発生動向調査に基づく患者発生状況について動向をまとめた．

全数把握対象疾患では「結核」が最も多く，全体の約 4 割を占めた．年間届出数は，昨年よりやや減少したが，月別届出数から季節的な特徴は見られなかった．年齢別では 60 歳以上の高齢者の割合が高く，性別では「男性」がやや多かった．年齢別に類型を比較した場合，50 歳以上では約 8 割が「患者」であったのに対し，50 歳未満では「無症状病原体保有者」が約 6 割を占めた．また届出者の職業別において，医療・介護などの施設関係者や建設業，調理師等，人と接する機会の多い者も見られたことより，施設関係者に対する感染予防，施設内感染対策の徹底が重要と考えられた．

「腸管出血性大腸菌感染症」は，平成 24 年（2012 年）6 月の厚生労働省通知による牛生レバーの提供禁止以降減少したものの，依然として，夏から秋季に集中して報告されている．感染拡大を防ぐため，手洗い･消毒の徹底，食品の十分な加熱及び衛生的な取り扱いなど予防啓発をしっかり行うことが必要である．

「重症熱性血小板減少症候群」や「日本紅斑熱」，「つつが虫病」などマダニ等の刺咬による感染症が，野外作業機会の多い中高年者を中心に多く報告された．ダニ・昆虫媒介性疾患に対する正しい知識の普及とともに，予防対策の啓発も重要と考えられた．

近年，全国的に「梅毒」の届出が増加傾向にあり，徳島県においてもここ数年高い報告数となっている．「後天性免疫不全症候群」と共に，報告の多い 20～40 歳代を中心に，感染者とそのパートナーに対して，より積極的な感染予防啓発の推進が重要と考えられた．

定点把握対象疾患（週報）では，冬から春先にかけて「インフルエンザ」，「感染性胃腸炎」が流行し，夏風邪の代表とされる「手足口病」は 2 年ぶりの流行年となった．

「RS ウイルス感染症」は，7 月下旬より報告数が増加し，流行期間が長く，報告数も全国平均を上回った．

「伝染性紅斑」は，3 年ぶりの流行となったが，さらにその報告数は 2011 年以来の高値であった．

眼科定点報告疾患，基幹定点報告疾患については，年間を通じて報告数は低値で推移した．

定点把握対象疾患（月報）の基幹定点報告疾患である薬剤耐性菌感染症については，総報告数に大きな変化は見られず「メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症」が大半を占めた．

また，性感染症定点報告疾患について総報告数は前年と変化がなく，男女別報告数も前年と同様に男性からの報告が多かった．報告数の多い 20～40 歳代の男性を中心に引き続き予防啓発を行うとともに，10 歳代の若年者に対する予防教育も重要と思われた．

今後も引き続きデータの集積を行い感染症の発生動向に注意していくとともに，迅速かつ適切な情報提供を行っていきたい．